

[研究ノート]

発達障害概念の再検討と特別支援教育の現状

柴田 保之

【要旨】

発達障害という言葉で表現される概念は、差別という意味を内包する「障害」という名称で表現してよいかどうかということをめぐる、その概念の成立の歴史的経過を追いながら問題点を明らかにした。そして、発達障害と深く関わる特別支援教育の成立やインクルーシブ教育の議論の進展について整理し、特別支援教育の現状がインクルーシブ教育の世界的な潮流と必ずしも一致していない日本の現状を指摘し、さらに、特別な教育的ニーズの内実を、子どもが真に教育に対していただいている根本的なニーズとともに整理し、現在の特別支援学校や地域の学校で、そうしたニーズがどのように応えられているのかということを検討した。そして、最後に、自分自身の障害を当事者がどうとらえているかということについてまとめ、発達障害という呼び方の問題点を確認した。

【キーワード】

発達障害 特別支援教育 インクルーシブ教育 特別な教育的ニーズ 差別

1. はじめに

発達障害という言葉が社会のすみずみまで定着して長い時間が経過した。

筆者は、この言葉が従来の発達障害概念を押しよけるようにして定着していく姿を目撃しながら、大切なことが置き去りにされていくのをはがゆい思いで見つめてきた。もはやこの時間の流れを巻き戻すことは不可能であるし、発達障害をめぐる現状にゆさぶりをかけることなど容易ではないことは重々承知している。しかし何らかのかたちで現在の状況に対して言うべきことは明らかにしておきたい。

発達障害を考えるにあたって、発達障害と呼ばれている現象を明確にすることや、その現象に対するよりよい関わり方については、当事者やその家族、様々な関係者や専門家の真摯な努力によって、着実に明らかにされており、このこと自体は望ましいことだと考えられる。

本稿で検討したいのは、それらとは別に、発達障害として明らかにされてきた様々なことを、発達障害という術語によって表現することの問題である。それは、単なる言葉の問題にとどまるものではなく、その言葉を選んだという事実がもたらした負の現実の問題にも目を向けることを意味している。あらかじめ、その問題点の核心部分を短く言うと次のことになる。すなわち、障害という概念は差別を内包しているので、それまで存在しなかった新しい障害が作られると、新